

幼児効果に関する研究について

守屋 光雄

幼稚園（または保育所）における保育効果に関する研究は、幼児教育の実践的課題とも結びついて、これまで、種々の方法でおこなわれてきた。日本保育学会などにおいても、この種の研究が毎会発表されているし、現場の研究会などでも、討議されることが少なくない。

私も、「幼児の発達と保育期間との関係」という題目で、日本保育学会第十回ならびに第十一回大会において研究発表をおこなった。その要旨は、それぞれの大会における「発表要項」及び「幼児の教育」の大会特集号に掲載されているので、ここで重ねて述べることをさける。（註一）

そこで、本稿では、私の手許にある坂東義教の「小学校の入学当初に見られる就園児と不就園児との差異に関する心理学的研究」^(註二) という論文にみられる問題点を考察してみたいと思う。

この研究は、坂東氏が別稿に示しておられるように就園児（幼稚園、保育所などにおいて保育をうけた児童）と、家庭児（家庭教育しか受けなかった児童）との就学時における心理的差異を明らかにすることを目的とし、あわせて、幼児教育における効果の実証などを研究しようとしている。方法としては、主として、質問紙法によって、二二校の一年生の一二四学級の担任教師に

研究者が指定した児童について、視察、評価を依頼した。対象児童数六六三一名、各校の各級から就園児男女一名、家庭児男女一名、計四名ずつを無作為抽出した大規模な調査である。

調査結果によると、身体測定、身体状況、運動機能、健康的習慣などについてはいずれも就園児がすぐれている。また、生活態度、社会性、性格、情緒的発達および学業など、いずれも就園児の方が家庭児よりもすぐれている。就園児の方が望ましくない行動特性も、少しくあらわれているが、この点は坂東氏が別稿で詳述しておられるので省略し、以下にこのような結果について考えてみなければならぬ点を指摘しよう。

私が特に、この論文をここに取りあげたのは、この種の研究として、すぐれたものの一つであり、その調査結果は、幼年教育にたずさわる現場の人たちにも役立つことが多いと思うからである。たしかに、この

研究は、研究目標を明確に把握し、調査の内容、方法、結果の整理及び考察においても、慎重な配慮と技術のもとにおこなわれている。しかし、坂東氏も反省しているように、この調査にも、問題点がある。この研究の結果によると、多くの点において就園児は家庭児よりすぐれていることが明らかにされているが、これらはすべて、幼稚園（保育所）における保育効果と言えるであろうか。調査対象の児童は、系統的抽出法によって抽出されているが、就園児と家庭児との生活環境条件は統制（等質化）されてはいない。否、生活環境水準は就園児の方がはるかに高いことも明らかにされている。すると、諸調査の結果において、就園児がすぐれていると言っても、それは必ずしも保育効果によるのではなく、生活環境の相違によるとも考えられる。坂東氏の研究に限らず、従来の研究においても、調査児童の環境条件の統制（等質化）の配慮のないものが多くあった。この問題は今後大いに

配慮しなければならない。しかし、実際問題として、家庭環境を完全に等質化することは不可能に近いが、主要条件において近似のグループをつくることなら可能である。

しかし、坂東氏の研究でも、生活環境条件の等質化が出来ていないからと言って、調査結果を全然否定することも間違いである。例えば、就園児にあらわれた優れた傾向の大部分は、家庭教育だけでは培い得ない特性であり、家庭児に多くみられる望ましからざる傾向は、いずれも、集団生活経験の貧困に由来することも事実であるからである。

更に、保育効果を云々する場合、家庭環境が統制されたときでも、十分な条件分析をしないで、保育効果と結びつけることは危険である。前記の私の研究結果についても、保育期間の長い児童の検査結果がすぐれ、推計的に有意の差が認められても、それらをすべて保育効果と断定するには十分

慎重であらねばならない。この場合にも、諸条件のからみあいの結果としてとらえなければなるまい。またこれらの保育効果の問題を考える場合、それがまさしく保育効果によるものか、当然の正常な成長発達によるものかも慎重に考察する必要がある。なお、いろいろ考察すべき問題もあろうと思うが、与えられた紙数もこえるので、ひとまずペンをおくことにする。

(註一) 編集部より私がこれまでやった保育効果に関する研究を紹介して問題と見直しを指摘するよう御依頼があったが、本誌大会特集号及び日本保育学会大会発表要項に指摘掲載のものと重複し、かつ与えられた紙数の大部分をその記述に費すおそれがあったので、敢えて省略した。

(註二) 坂東義教「小学校の入学当初に見られる就園児と不就園児との差異に関する心理学的研究」北海道学芸大学紀要（第三部）第八巻第一号 昭和三年九月